

# 黒い人と赤いそり

小川未明

青空文庫



はるか、北きたの方ほうの国くににあつた、不思議ふしぎな話はなしであります。

ある日ひのこと、その国くにの男おとこの人ひとたちが氷こおりの上うへで、なにか忙いそしうがに働はたらいていました。冬ふゆになると、海うみの上うへまでが一面めんこおりに氷こおりで張はりつめられてしまうのでした。だから、どんなに寒さむいかということも想像そうぞうされるでありましょう。

夜よるになると、地球ちきゅうの北きたのはてであつたから、空そらまでが、頭あたまの上うへに近く迫せまつて見みえて、星ほしの輝かがやきまでが、ほかのところから見みるよりは、ずつと光ひかりも強つよく、大おおきく見みえるのでありました。その星ほしの光ひかりが寒さむい晚ばんには凍こおつて、青あおい空そらの下したに、幾いくすじ筋すじかの銀ぎんの棒ぼうのように、にじんでいるのが見みられたのです。木立こだちは音おとを立てて凍い

割われますし、海うみの水みずは、いつのまにか、動うごかなくなるとぎすました鉄てつのように凍こおってしまつたのであります。

そんなに、寒さむい国くにでありましたから、みんなは、黒くろい獣けものの毛皮けがわを着きて、働はたらいていました。ちようど、そのとき、海うみの上うえは曇くもつて、あちらは灰はい色いろにどんよりとしていました。

すると、たちまち足あしもとの厚あつい氷こおりが二つに割われました。こんなことは、めつたにあるものでありません。みんなは、たまげた顔かおつきをして、足あしもとを見みつめていますと、その割われ目めは、ますます深ふかく、暗くらく、見みるまに口くちが太おほくなりました。

「あれ！」と、沖おきの方ほうに残のこされていた、三人にんのものは声こえをあげましたが、もはやおよびもつかかなかつたのです。その割われ目めは、飛と

び越すことも、また、橋を渡すこともできないほど隔たりができて、しかも急流に押し流されるように、沖の方方へだんだんと走つていつてしまつたのであります。

三人は、手を挙げて、声をかぎりに叫んで、救いを求めました。陸の方に近い氷の上に立つているおおぜいの人々は、ただ、それを見送るばかりで、どうすることもできませんでした。

たがいにわけのわからぬことをいつて、まごまごしているばかりです。そのうちに、三人を乗せた氷は、灰色にかすんだ沖の方へ、ぐんぐんと流されていつてしまいました。みんなは、ぼんやりと沖の方を向いているばかりで、どうすることもできません。そのうちに、三人の姿は、ついに見えなくなつてしまいました。

あとで、みんな大騒おおさわぎをしました。氷こおりがとつぜん二つに割われて、しかもそれが、箭やを射いるように沖おきの方ほうへ流ながれていつてしまふことは、めつたにあるものでない。こんな不思議ふしぎなことは、見みたことがない。それにしても、あの氷こおりといつしよに流ながされてどこかへいつてしまった三人にんを、どうしたらいいものだろうと話し合あいました。

「いまさらどうしようもない。この冬ふゆの海うみに船ふねを出だされるものでなし、後あとを追おうこともできないではないか。」と、あるものは、絶ぜつ望ぼうしながらいいました。

みんなは、うなずきました。

「ほんとうにしかたがないことだ。」といいました。しかし、五

人のものだけが頭を振りました。

「このまま仲間を、見殺しにすることができないものでない。どんなことをしても、救わなければならぬ。」と、それらの人々はいいました。

すると、おおぜいの中の、あるものは、

「今度のことは、この国があつてから、はじめてのことだ。人間業では、どうすることもできないことだ。」といったものがあります。

なるほど、そのものがいうとおりだと思つたのでしよう。みんなは、黙つて聞いていました。

「みんながゆかなければ、俺たち五人のものが助けにゆく。」と、

五人は叫びました。

ちようど、この国には、赤いそりが五つありました。このそりは、なにかことの起こったときに、犬にひかせて、氷の上を走らせるのでした。

夜の中に、五人のものは、用意にとりかかりました。食べるものや、着るものや、その他入り用のものをそりの中に積み込みました。そして、夜の明けるのを待っていました。その夜は、いつにない寒い夜でしたが、夜が明けはなれると、いつのまにか、海の上には昨日のように、一面氷が張りつめて光っていたのです。

五人のものは、それぞれ赤いそりに乗りました。そして、二、三匹ずつの犬が、一つのそりをひくのでした。



昨日行方不明きのうゆくえふめいになった、三人にんのものの家族かぞくや、たくさんの群ぐんし集ゆうが、五つの赤あかいそりが、捜索そうさくに出でかけるのを見送みおくりました。「うまく探さがしてきてくれ。」と、見送みおくる人々ひとびとがいました。「北きたのはしの、はしまで探さがしてくる。」と、五人にんの男おとこたちは叫さけびました。

いよいよ別わかれを告つげて、五つの赤あかいそりは、氷こおりの上うえを走はしり出でました。沖おきの方ほうを見みやると、灰はい色いろにかすんでいました。ちようど、昨日きのうと同おなじような景色けしきであつたのです。みんなのものの胸むねの中うちには、いい知しれぬ不安ふあんがありました。そのうちあかに、赤あかいそりは、だんだん沖おきの方ほうへ小ちいさく、小ちいさくなつて、しまいには、赤あかい点てんのよようになつて、いつしか、それすらままったくかすんでしまつて、見み

えなくなつたのであります。

「どうか無事に帰つてきてくれればいいが。」と、みんなは、口ちくちく々にいいました。そして、ちりぢりばらばらに、めいめいの家へ帰つてしまいました。

その日の昼過ぎから、沖の方は暴れて、ひじょうな吹雪になりました。夜になると、ますます風が募つて、沖の方にあたつて怪しい海鳴りの音などが聞こえたのであります。

その明くる日も、また、ひどい吹雪でありました。五つの赤いそりが出発してから、三日めに、やっと空は、からりと明るく晴れました。

三人の行方や、それを救いに出た、五つの赤いそりの消息

をき気づかひとつて、人々は、みんな海うみ辺べに集あまりました。もとより海うみの上うえは、鏡かがみのようこに凍おつて、珍めづしく出でた日ひの光ひかりを受けうけて輝かがいています。

「ひどい暴あれでしたな。」

「それにつけて、あの三人にんと、五つのそりの人ひとたちは、どうなりましたことでしょうか、しんぱいでありません。」

群ぐん衆しゆうは、口くち々ぐちにそんなことをいいました。

「五日いつ分の食しょく物もつを用よう意いしていったそうです。」

「そうすれば、あと二日ふつしかないはずだ。」

「それまでに帰かえつてくるでしょうか。」

「なんともいえませんが、神かみに祈いのつて待またなければなりません。」

みんなは、気づかわしげに、沖の方を見ながらいつていました。  
 沖の方は、ただ、ぼんやりと氷の上が光っているほか、なんの影も見えなかつたのです。

とうとう、赤いそりが出てから、五日めになりました。みんなは、今日こそ帰ってくるだろうと、沖の方をながめていました。  
 その日も、やがて暮れましたけれど、ついに、赤いそりの姿は見えませんでした。

六日めにも、みんなは、海岸に立って、沖の方をながめていました。

「今日は、もどつてくるだろう？」

「今日帰つてこないと、五つのそりにも変わりがあつたのだぞ。」

みんなは、口々くちぐちにいつていました。

しかし、六日むいかめにも帰かえつてきませんでした。そして、七日なのかめも、八日ようかめも……ついに帰かえつてきませんでした。

「捜さがしにいったが いいものだろうか、どうしたらいいものだろう……。」

みんなは、顔かおを見合みあつていいました。

「だが、こんどは捜さがしにいくか。」と、あるものはいいました。みんなは、たがいに顔かおを見合みあいました。けれど、一人ひとりとして、自分じぶんがいくという勇気ゆうきのあるものはありませんでした。

「くじを引ひいて決きめることにしようか。」と、ある男おとこはいいました。

「俺おれは、怖おそろしくていやだ。」

「俺おれもいくのはいやだ。」

「……………」

みんなは、後あと退じさりをしました。それでついに、救すくいに出でかけるものはありませんでした。みんなは、口くちぐち々にこういいました、  
「これは災さい難なんというものだ。人にん間げん業わざでは、どうすることもでき  
ないことだ。」

彼かれらは、そういつて、あきらめていたのであります。

それから、幾いく年ねんもたつてからです。

ある日ひのこと、獵り師ようしたちが、幾いくそうかの小こ舟ぶねに乗のつて沖おきへ出で

ていきました。真つ青な北海の水色は、ちょうど藍を流したように、冷たくて、美しかったのであります。

磯辺には、岩にぶつかって波がみごとに砕けては、水銀の珠を飛ばすように、散っていました。

猟師たちは唄をうたながら、艀をこいだり、網を投げたりしてきますと、急に雲が日の面をさえぎったように、太陽の光をかげらしました。

みんなは不思議に思つて、顔を上げて、空を見上げようとしますと、真つ青の海のおもてに、三つの黒い人間の影が、ぼんやりと浮かんでいるのが見えたのです。その三つの黒い人間の影には足がありませんでした。

足あしのあるところは、青あおい青あおい海うみの、うねりうねる波なみの上うえになつていて、ただ黒坊主くろぼうずのように、三つの影かげが、ぼんやりと空間くうかんに浮うかんで見みえたのであります。

これを見みた、みんなのからだは、急きゆうにぞつとして身みの毛けがよだちました。

「いつか行方ゆくえのわからなくなつた、三人にんの亡霊ぼうれいであろう。」と、みんなは、心こころでべつべつに思おもいました。

「今日は、いやな物ものを見みた。さあ、まちがいのないうちに陸りくへ帰かえろう。」と、みんなはいいました。そして、陸りくに向むかつて、急いそいで舟ふねを返かえしました。

しかし、不思議ふしぎなことに、まだ陸りくに向むかつて、幾いくらも舟ふねを返かえさ



ないうちに、どの船も、なんの故障がないのに、しぜんと海にのみ込まれるように、音もなく沈んでしまいました。

つぎの話は、寒い冬の日のことです。海の上は、あいかわらず、銀のように凍っていました。そして、見わたすかぎり、なんの物の影も目に止まるものとはありませんでした。

よく晴れた、寒い日のことで、太陽は、赤く地平線に沈みかかっていました。

このときたちまち、その遠い、寂寥の地平線にあたって、五つの赤いそりが、同じほどにたがいに隔てを置いて行儀ただしく、しかも速やかに、真一文字にかなたを走っていく姿を見ま

した。

すると、それを見た人々は、だれでも声をあげて驚かぬものはなかったのです。

「あれは、いつか、三人を捜索に出た、五人の乗っていた赤いそりじゃないか。」と、それを見た人々はいったのです。

「ああ、この国に、なにか悪いことがなければいいが。」と、みんなはいいました。

「あのとき、あの五人のものを救いに、だれもいかなかったじゃないか。」

「そして、あの後、なにもお祭りひとつしなかったじゃないか。」  
 みんなは、行方のわからなくなった、仲間に対して、つくさな

かつたことが悪いと、はじめて後悔しました。

この国くににきたひとは、黒い人くろひとと赤いあかそりのはなしを、不思議なふしぎ事実じじつとして、だれでも聞かきされるでありますよう。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1922（大正11）年1月

※表題は底本では、「黒《くろ》い人《ひと》と赤《あか》いそり」となっています。

※初出時の表題は「黒い人と赤い櫓」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

2012年12月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 黒い人と赤いそり

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>